

平成 20 年度

学位（博士）の授与に係る論文内容
の要旨及び論文審査結果の要旨

(平成 20 年 9 月授与分)

北九州市立大学大学院
社会システム研究科

目 次

学位番号	学位被授与者氏名	論文題目	頁
甲第36号	篠原 征子	中国語における線形順序に基づく焦点化研究 —英語・日本語を対照して—	1
甲第37号	鬼頭 孝子	演劇祭ツーリズムの研究 —Culture Destinationとしての演劇祭—	5
甲第38号	吉村 英俊	北部九州地域の拠点都市における地域イノベーションと 都市間連携に関する研究	8

学位被授与者氏名	篠原 征子 (しのはら せいこ)
本籍	福岡県
学位の名称	博士 (学術)
学位番号	甲第36号
学位授与年月日	平成20年9月29日
学位授与の要件	学位規則 (昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
論文題目	中国語における線形順序に基づく焦点化研究——英語・日本語を対照として——
論文題目 (英訳または和訳)	A Study on the Movements for Focusing in Chinese ——In Contrast with English and Japanese——
論文審査委員	論文審査委員会審査委員 (主査) : 北九州市立大学外国語学部 教授 山崎 和夫 同審査委員 : 北九州市立大学外国語学部 教授 佐藤 昭 同審査委員 : 産業医科大学医学部 准教授 大橋 浩
論文審査機関	北九州市立大学大学院社会システム研究科
審査の方法	北九州市立大学学位規程 (平成17年4月1日大学規程第96号) 第10条各号の規定に基づく学位授与判定による
論文内容の要旨	<p>本研究は、機能主義と形式主義が互いに補う関係であるという立場に立ち、三層理論の枠組みの中で、以下の7種類の同じ命題意味、異なる語順を持つ2つの文が存在する現象を認知的、語用論的、統語論的分析、及び日本語と英語の類似現象と対照比較することを通して、中国語における線形順序に基づく焦点化方法を考察したものである。</p> <p>(1)a. 他在大阪住。彼は大阪に住んでいる。 b. 他住在<u>大阪</u>。彼は大阪に住んでいる。</p> <p>(2)a. 七个小矮人住在<u>小白房子里</u>。七人の小人は小さな白い家に住んでいる。 b. 小白房子里住着<u>七个小矮人</u>。小さな白い家に七人の小人が住んでいる。</p> <p>(3)a. 上边儿放<u>好苹果</u>。上にきれいなりんごを置く。 b. 好苹果放<u>上边儿</u>。きれいなりんごは上に置く。</p> <p>(4)a. 请关<u>上门</u>。ドアを閉めてください。 b. 请把门<u>关上</u>。ドアを閉めてください。</p> <p>(5)a. 我买了顶<u>呢子</u>的帽子。私はラシヤの帽子を買いました。 b. 我买了顶帽子<u>呢子</u>的。私は帽子を買いました、ラシヤの。</p> <p>(6)a. 他一个儿子死了。彼の一人の息子が死んだ。 b. 他儿子死了一个。彼の息子の一人が死んだ。</p> <p>(7)a. 你怎么了? あなたどうしたの。 b. 怎么了, 你? どうしたの、あなた。</p> <p>序章では、まず機能主義と形式主義が互いに補う関係であるという立場をとる必要性を述べた。次に、三層理論および三層理論に基づく文の生成過程 (意味構造生成レベル→語用構造生成レベル→統語構造生成レベル) を述べ、その</p>

正確性について論じた。また、本稿で用いる焦点、焦点化及び移位などの概念を説明した。さらに、これまでの線形順序における要素の焦点化方法に関する先行研究を概観し、3つの疑念を提起した。第1章では、中国語の焦点位置は線形順序の文末にあることを確認、証明した。しかし、(7b)においては「你」が文末に移位されたにもかかわらず、焦点として解釈されない現象から、中国語の文末は複雑な構造をしている点を指摘している。

また、「命題意味、異なる語順を持ついくつかの文は、その中の一つが基本文で、他は要素の焦点化という語用論的な必要に応じて、基本文の基に要素を文末焦点位置へ移位することによって生成された派生文である。」の仮説を立て、この仮説の妥当性を検証するために(1)～(7)のような7種類の同じ命題意味、異なる語順を持つ2つの文が存在する現象を認知的、語用論的、統語論的分析、及び日本語と英語の類似現象と対照比較考察を行った。

第2章では文(1)について、PTS原則に基づきその実質は、存現動詞述語において、a文は意味構造形成段階で生成された基本文であり、b文は語用構造形成段階において、「在+トコロ」を焦点化するために文末位置へ移位されたことを証明した。

第3章では、文(2)について、類似性原則に基づき、認知的、意味的分析、それから「定的要素」及び「不定的要素」のa、b文へ適応状況の考察を通して、その実質は、存現文において、a文は基本文であり、b文は語用構造形成段階において、焦点化するために当該要素を文末位置へ移位することによる派生文であることを証明した。

第4章では、文(3)について、認知的、意味的分析及び介詞のa、b文への適用状況を考察することによって、また第5章では、「把」に関する通時的分析、および「定的要素」及び「不定的要素」のa、b文へ適応状況の考察を通して、例文(3)、及び(4)の実質は、a文は意味構造形成段階で生成された基本文であり、b文は語用構造形成段階において、当該要素を焦点化するために文末位置へ移位することによる派生文であることが明らかになった。

第6章では、まず、例文(5)について、インタビュー及び英語での同類現象との対照比較を用いて、(5)bは複文ではないことを証明した。次に、意味間近原理、相隣原則に基づき、例文(5)の実質は、存在・出現などの意味を持つ自動詞あるいは他動詞文において、a文は意味構造形成段階で生成された基本文であり、b文は語用構造形成段階において、基本文で文頭あるいは文中位置に生成された名詞の性質状態を限定する連体修飾語を焦点化するために文末位置へ移位することによる派生文であるということを明らかにした。さらに、文末焦点位置への移動は不変役移動と変役移動の2種類あることを指摘し、その原因は中国語が顕著な動詞中心的言語にあると述べた。

第7章では、例文(7)において、要素が文末に移位されたにもかかわらず、焦点として解釈されないのはなぜなのかという問いに答えるべく、次の仮説「中国語の文末位置は焦点区域の終端と焦点区域外地域によって構成されている。易位操作は非焦点要素を焦点区域外地域へ移動することによって、焦点区域が

	<p>狭まり、焦点要素をより際立たせる。」を立て、この仮説の妥当性を日本語及び英語の類似現象との対照比較分析を用いて論証した。また、音韻的証拠、語用論的証拠も合わせて提示した。これにより、例文(7)の實質は、a文は意味構造形成段階で生成された基本文であり、b文は語用構造形成段階において、基本文で文頭や文中位置に生成する要素を文末焦点区域外地域に移位し、焦点区域を狭め、焦点区域の残った要素を焦点として強化するための派生文であることを明らかにした。</p> <p>終章では、本稿各章で得られた結論をまとめた上、中国語における線形順序に基づく焦点化方法は2種類であり、一つは意味構造形成段階で文頭あるいは文中に生成する要素を文末焦点位置に移位することで、移位された要素は焦点化されること、もう一つは意味構造形成段階で文頭あるいは文中に生成する要素を文末焦点区域外地域に移位することで、焦点区域が狭まり、移動されていない要素が焦点化されることを指摘した。</p>
<p>論文審査結果の要旨</p>	<p>中国語における文末の焦点化が移動により派生されることを論じたものであり、先行研究の批判的検討、問題点の指摘、事実の分析において手堅く行われている。分析には動詞の意味分類や焦点名詞句の定性や特定性、文脈など、関与すると思われる要因が適切に論じられている。随所に中国語の移動現象を説明するために、日本語や英語との比較も行われ、より包括的な比較研究の態度も確立されている。なによりも、「焦点外区域」を設定してこれまで不明瞭であった文末の焦点に関して明解な説明を行ったことは独創的である。</p> <p>以下、項目ごとに詳細を述べていく。</p> <p>1. 三層構造理論を枠組みとして採用することにより、理論の基盤が確立されており、議論が強固なものとなっている。つまり、移動という操作（装置）の根拠が三層構造理論により与えられ、それを用いて焦点を論じた主張と個別の議論が明確で一貫したものとなっている。三層構造理論の理論的説明も詳細に行われている。また、この三層構造理論の他に「同一命題はどの言語も基本語順は一つであり、それ以外の語順はすべて変形により派生された」を基盤として議論が展開されており、また、命題となる意味論的構造表出文は認知的観点（概念構造的な意味での）から根拠を与えられており、この点も移動という概念の必要性、移動による派生という立場を支持している。</p> <p>2. 中国語において、これまでの焦点の研究では混迷していた移動（もしくは移動と考えられなかった）現象をすべて一貫して右への移動（焦点化）として位置づけ、その根拠を示している。「在+トコロ構文」、「目的語と主語の転換」などに関して、まず、認知論的観察から、意味論的構造を認定し、これらは移動による派生が関与していること、更に、これまで言及されなかった移動の順序などが手堅く論じられている。論じる際には、特に統語論的、機能論的、語用論的証拠を用いて十分に議論が行われ、説得力がある。</p>

3. 英語、日本語の焦点化移動を中国語での移動の根拠として適宜生かして用いている。つまり、日英語を利用して、中国語の移動を想定し、その妥当性を示している。さらに、日本語、中国語との移動を比較するという作業の中で、如何に中国語が語の位置を入れ替えることにより、外界をそのまま表す手段としているかを浮き彫りにしている。このような点でも言語の比較研究の発展性が窺える。

4. この研究での独創性は「焦点外区域」という概念を音韻的、また統語論的証拠を提示して設定し、これまで明確でなかった現象を説明しようとしたことである。中国語の焦点現象の問題として、文末にある要素が、焦点を成す場合と焦点としては認識できない場合があることが観察されていた。まず、この文末焦点をなさない場合を英語、日本語の類似した現象から説明し、焦点でないことを確認し、これらの要素は焦点区域外への位置へ移動した、という仮説をたてて、説明している。また、英語、中国語ではこの焦点外区域は、SVO言語であるために、線的順序では同じ文末の位置を占めることになり、外見上は区別がつかないことになるが、この区域の存在を示す音韻的また、統語論的証拠を提示して論じている。この仮説は、日本語、英語での文末移動であるが焦点をなさない現象を統一的に説明できるという点でもより説得力があるといえる。

以上の観点から、篠原征子氏のこの研究論文は博士論文に十分に値するものであると判断する。

平成20年8月26日に、北九州市立大学北方キャンパス都市政策研究所会議室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が博士(学術)として十分な内容であると判定した。

学位被授与者氏名	鬼頭 孝子 (きとう こうこ)
本籍	東京都
学位の名称	博士 (学術)
学位番号	甲第37号
学位授与年月日	平成20年9月29日
学位授与の要件	学位規則 (昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
論文題目	演劇祭ツーリズムの研究—Culture Destinationとしての演劇祭—
論文題目 (英訳または和訳)	A Study of Theatre Festivals as Culture Destination
論文審査委員	論文審査委員会審査委員 (主査) : 北九州市立大学大学院社会システム研究科 教授 工学博士 谷村 秀彦 同審査委員 : 筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授 博士 (文学) 米澤 茂 同審査委員 : 北九州市立大学外国語学部 教授 博士 (文学) 木下 善貞
論文審査機関	北九州市立大学大学院社会システム研究科
審査の方法	北九州市立大学学位規程 (平成17年4月1日大学規程第96号) 第10条各号の規定に基づく学位授与判定による
論文内容の要旨	<p>本研究は、近年、世界各地でいわゆる文化観光の目的地として注目されている演劇祭をとりあげ、それがどのような特質により観光の目的地としての求心力を持っているのかを多面的に考察したものである。特に、演劇の持つ祭儀性に注目し、ある集団の祭儀はその民族や地域の共通の体験を日常から離れて非日常的な時空間において共有し、自己覚醒を生起させることに端を発しており、これが巡礼の歴史的起源であるとする。現代の演劇祭もこの儀式化されたパフォーマンスとしての特性を備えており、歴史的な祭儀に代わる世俗的な祝祭とし巡礼体験と同義的な体験を参加者に与えることが演劇祭の本質的な魅力であると主張する。本研究において著者は、国内外の多くの演劇祭の事例研究を行い、多様な関連分野の先行研究を参照して演劇祭がどのようにして覚醒を生起させるかを考究し、演劇祭に参加することによって得られた自己体験からその具体的な過程を記述してこの仮説を論証している。</p> <p>本論文は、序章、「Culture Destination としての演劇祭」と題する第Ⅰ章、「演劇祭事例研究」と題する第Ⅱ章、「覚醒生起の構造」と題する第Ⅲ章、「演劇祭参加・観客の能動性の記録」と題する第Ⅳ章、そして終章から構成され、事例研究にとり上げられた演劇祭のプログラムと演じられた作品の概要が資料として添付されている。</p> <p>序章においては、本研究の問題意識、背景と目的が述べられ、先行研究と比較して本研究が「演劇祭の観光目的地としての求心力を巡礼との同義性に視座を置いて」考究していることにその意義があるとしている。</p> <p>第Ⅰ章では、演劇祭と巡礼との相関関係が序説として展開されている。祭儀の本質は集団としての儀式化されたパフォーマンスであるが、すべての都市に</p>

	<p>伝統的なイベントがある訳ではなく歴史的な祭儀に代わる求心力を持つイベントとして音楽や演劇をアトラクションとする文化ツーリズムが生まれる。祭儀性が希薄になっている現代社会において、人々は観光の中に巡礼体験と同義性のある自己覚醒の機会を得られるような祭儀性を希求しているのではないかと著者は述べる。</p> <p>第Ⅱ章は、国内外の演劇祭の詳細な体験的事例研究である。著者が体験した14の演劇祭を3つのグループに分けて、それぞれの演劇祭の歴史、場所性（トポス）、プログラムの概要などが詳細に記述されている。すなわち、第1に、歴史的な空間に展開される「場所を消費する」演劇祭として、ギリシャのAthens Festivals, Epidaurus Festivalsの2つ、ドイツOberamgauの受難劇、四国のこんぴら歌舞伎、英国スカボロのStephen Joseph Theatreがとり上げられている。第2に、大都市規模の「世界最大の演劇祭」を自称するフランスのFestival d' Avignon、英国のEdinburgh International Festival、オーストラリアのAdelaide Festival of Artsを分析している。そして第3に、文化観光の目的となるイベントとして企画された英国のThe Minack Theatre、米国のOregon Shakespeare Festival、カナダのStratford Festival of Canada、日本の利賀演劇祭、Shizuoka春の芸術祭、北九州演劇祭が論じられる。</p> <p>第Ⅲ章では、演劇祭と観光、または巡礼のそれぞれが共通して希求する自己覚醒がどのように生成されるものかを考察している。まず、古代ギリシャにおける演劇の発展過程を考察し、演劇がその発生過程において巡礼の目的地としての意味を持っていたことを述べている。さらに、巡礼の目的地の時空間は非日常性の場所（トポス）でなければならないとし、このトポスの魅力が人を移行させる求心力であるとしている。</p> <p>第Ⅳ章では、演劇祭参加は巡礼と同義性をもつという観点から、著者の体験を通して、演劇祭参加者がいかにして自己覚醒を獲得するかを内観的に考察している。演劇空間が演者と観客のコミュニケーションのシステムであることが演劇祭のもつ求心力に深く関わっているのではないかと考察している。</p> <p>終章では、これまでの論証を背景として、演劇祭のもつ求心性を、祭りとしての求心力、ディレクターの求心力、演じられる作品の求心力、トポスの求心力、場所性のないところどこにいか場所としての求心力を与えるかといういわゆるplacelessnessの観点、文学としての戯曲とテキストの問題、移行する道程の求心力といった課題を論じることによって結論としている。また、資料として事例研究でとり上げられた演劇祭のプログラムと重要な演目の梗概がつけられている。</p>
論文審査結果の要旨	<p>本研究は、国際文化観光の目的地として注目されている演劇祭を多面的にとり上げ、その観光デスティネーションとしての求心力を、演劇祭参加と巡礼体験との間には同義性があるという観点から論証したユニークな研究として大変、魅力的であり、他分野の先行研究を幅広く敷衍し、体験的な多くの事例研究と内観的な考察にもとづく力作として高く評価できる。その分析の視座は、</p>

演劇祭の社会的・歴史的および地域的な背景の考察から演劇という芸術のもつ文学的要素や覚醒体験の内観的な分析などの考察を含む極めて学際的な領域を包含している。また、演劇祭の事例研究の詳細な資料は演劇祭研究の貴重な資料になるものと思われる。本論文を一読した読者に自分もまた、覚醒体験を求めて演劇祭に参加してみたいという意欲を起させるのではなかろうか。

全体の構成を見ると、第Ⅰ章から第Ⅲ章までは演劇祭の客観的な記述と分析であるのに対比して、第Ⅳ章は著者自身の個人的参加体験の内観的分析であり、自己覚醒が参加者の個人的な体験なのか、或いはコミュニタスとしての共通体験なのか、それは演劇祭のプログラムとどう関連しているのかなどの自己覚醒の生起過程に関する論証を深めることが今後の課題として指摘できる。

著者も指摘しているように、我が国における演劇祭の文化ツーリズムのDestinyネーションとしての一般的な認知度はそれほど高いとは言えない。また、演劇という芸術が言語を媒介としていることを考慮すると、アジアのような多言語が使用されている地域において、具体的にどのような形態で国際的な演劇祭が可能であるかは難しい課題である。

しかしながら、本研究は、演劇祭研究という新しい分野に果敢に取り組み、多くの先行研究を精力的に敷衍し、論証を重ねて一つの学術論文としてまとめた力作であり、著者の力量は高く評価できる。総じて博士（学術）としての水準に十分到達していると判断される。

平成20年8月29日に、北九州市立大学北方キャンパス都市政策研究所会議室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施し、鬼頭孝子氏が優れた研究業績を既に有し早期修了の要件を満たしていることを確認し、論文内容の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が博士（学術）として十分な内容であると判定した。

学位被授与者氏名	吉村 英俊（よしむら ひでとし）
本籍	福岡県
学位の名称	博士（学術）
学位番号	甲第38号
学位授与年月日	平成20年9月29日
学位授与の要件	学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第4条第1項該当
論文題目	北部九州地域の拠点都市における地域イノベーションと都市間連携に関する研究
論文題目（英訳または和訳）	Regional Innovation and Inter-City Linkages Based on the Study of Core Cities in North Kyushu Region
論文審査委員	論文審査委員会審査委員（主査）： 北九州市立大学大学院社会システム研究科 教授 工学博士 谷村 秀彦 同審査委員： 金沢工業大学環境・建築学部 教授 Ph.D. 谷 明彦 同審査委員： 北九州市立大学大学院社会システム研究科 教授 博士（経済学） 井原 健雄
論文審査機関	北九州市立大学大学院社会システム研究科
審査の方法	北九州市立大学学位規程（平成17年4月1日大学規程第96号）第10条各号の規定に基づく学位授与判定による
論文内容の要旨	<p>経済のグローバル化が進み、地球規模のボーダレスな世界が出現しつつある。このような状況の中で地域経済の持続的な発展を図るためには、国家単位の中央政府指導型の政策には限界があり、自らの地域に蓄積する多様な資源及び特性を活用する内発的な発展を志向しなければならないとする問題意識を基礎に、北部九州地域の拠点都市における今後の内発的発展に向けたイノベーション振興の方策を本論文は考究している。ここでいうイノベーションとは、活気のある地域の産業経済を発展させる新技術や新製品が開発され、産業の高度化や新産業の形成が持続的に行われる地域発展のエンジンを指している。</p> <p>本研究では、特に北部九州地域にある拠点都市に注目し、これらの都市が特徴を活かして連携し総合力を発展することができるならば、地域が有する潜在力を顕在化し、国内第4の経済圏として、環黄海経済圏発展の主導的な地域に発展することができるという視点を強く主張している。</p> <p>本論文は、8章から構成されている。第1章と第2章は本研究の背景である我が国の地域産業・科学技術政策の変遷と北部九州地域の産業集積の状況とそのポテンシャルを分析している。第3章では、本論文の問題意識である地域イノベーションの重要性を、既往研究のレビューをもとに主張している。第4章から第6章までの3章が本研究の主要な調査研究である。第4章では拠点都市のイノベーション構造を多変量解析によって記述し、第5章では新規事業を展開するに当たって企業がどのように立地都市の選択をしているかをAHP（階層分析法）によって解析している。次に、第6章においてはイノベーションの担い手となる人材の居住地選好行動をコンジョイント分析等により分析し、イノベーションを生み出す「創造都市」の特性や機能の解明を試みている。第7章ではこれらの調</p>

査分析の結果からイノベーション促進に向けた都市連携の重要性を指摘し、終章である第8章では本研究の総括として北部九州地域のポテンシャルを十分に顕在化させるための具体的な政策提言を行っている。

次に、本研究の主要な業績である3つの調査分析の概要をのべる。第1に、「イノベーション構造の解明」と題される第4章においては、地域イノベーションの舞台となる拠点都市の構造を多変量解析によって解明することを試みている。調査対象としては、九州から福岡市、熊本市、長崎市、大分市、北九州市、国内の産業クラスター形成都市として知られる京都市、札幌市、浜松市の8市を選び、地域イノベーションに関連する都市特性を成果要素、直接的要因、間接的要因に分類し、クラスター分析により類型化する。さらに、それぞれの指標を用いて主成分分析を行い、成果要素の主成分を被説明変数とし、直接的要因と間接的要因の主成分を説明変数とする重回帰分析を行っている。結論として地域イノベーションの構成要素は、「都市機能の集積度」「工業の集積度」「地元自治体の積極性」「インフラの整備水準」「生活の安全・安心・快適度」「都市の魅力度・多様性」の6つに集約され、要因として第1に「都市の魅力度・多様性」、第2に「工業の集積度」であるとしている。

第2に、「新規事業展開における都市選択」と題する第5章においては、イノベーションの主体である企業の視点から、企業が新規事業をはじめるとき、どのような機能や特性を期待するのか、AHP（階層分析法）を用いて調査分析を行っている。都市選択の評価基準としては、「都市基盤」「都市の多様性」「研究基盤」「企業集積」「行政支援」の5項目とし、選択対象都市として「福岡型（広域中心都市）」「北九州型（工業都市）」「熊本・大分・長崎型（地方拠点都市）」の選択肢を設定した。また、調査対象企業を「基盤技術型」「研究開発型」「ソフトウェア開発型」「イノベーション支援型」の4種類に分類している。AHPにおいては、調査対象企業が立地都市としてどのような都市タイプを選択するか、その理由となる評価基準の相対的重要度を北部九州においてイノベーションにより組んでいる300弱の企業に対する郵送アンケートを実施している。その結果、「企業集積」「研究基盤」「行政支援」などの直接的機能を、「都市基盤」「都市の多様性」などの間接的機能よりも重視していること、ただし、その志向程度は業種によって差異があることを明らかにした。

第3に、「人材を誘引する都市の特性・機能」と題する第6章においては、イノベーションの源泉である人材に注目し、その担い手であることが期待される知識階層がどのような基準で居住地を選択しているかをコンジョイント分析により分析している。評価基準としては、「都市の活気、イメージ、景観」「魅力ある企業」「娯楽」「便利さ（買い物、交通、インフラなど）」「安全・安心・住宅」「教育環境」「行政サービス」の7項目を設定している。調査対象は福岡市、北九州市に立地するイノベーション企業に勤務する会社員である163票の有効回答を得ている。その結果、イノベーションを志向する人材であっても「安全・安心・住宅」や「教育」「行政支援」などの堅実に生活が営める機能特性

	<p>を、「都市の活気」「魅力ある企業集積」「娯楽」といった活動的な特性よりも重視している状況を読み取っている。企業側が工業集積を有した大都市」を志向するのに対し、イノベーションを担う人材は「堅実に生活できる環境」を期待しており、都市は二面性を持たなければならないと結論づけている。</p> <p>以上の調査分析を基礎として、本研究は、北部九州地域の地域発展のためには、異なる特性を持つ拠点都市間の連携と差別化を図り、我が国第4位の都市圏として総合力を発揮するべきであると結論している。</p>
<p>論文審査結果の要旨</p>	<p>本研究は、グローバル化という国際経済の状況の中で地域の持続的な経済発展に寄与するイノベーションの振興を図るために、北部九州地域はどのような科学技術・地域経済政策をとるべきかという課題に対し、都市構造、企業、人材の3つの観点から定量的な実証分析を試みた意欲的な研究として評価できる。</p> <p>第1章の我が国の地域産業・科学技術政策の変遷の記述は概ね妥当であり、中央政府の支援による経済発展から脱却し、地域の内発的な発展を志向すべき段階に来ているとする本研究の主張は地方分権の流れに沿っているものとして理解できる。また、第2章における北部九州地域のイノベーション振興の現状に関する肯定的な評価は、我が国の他地域との比較において説得力を持っている。第3章における既往研究のレビューは、近年の国内外の文献にはよく目を通しているが、都市成長論に関する都市経済学分野の基礎的文献が見当たらない。</p> <p>第4章から第6章までの本研究の主要な調査研究は、都市・企業・人材の3つの観点から統計資料を整理し、また、著者独自のアンケート調査等を行ったものであり、著者が多変量解析、AHP（階層分析法）、コンジョイント分析などの定量的分析手法を活用する実力を備えていることを示している。しかしながら、明らかにしようとしている課題の持っているであろう柔らかな問題構造に比較して、分析の道具は直交性等の機械的な仮定にもとづく剛な手法であり、多くの課題が分析道具の粗い網の目から漏れているかもしれない。また、多変量解析等の統計的な手法は、必ずしも因果関係を意味していないことも指摘しておかなければならない。</p> <p>第7章と第8章の分析と政策提言は、本研究の社会的な貢献として評価することができる。しかしながら、本研究の調査研究の結果のみから示唆される含意の枠を超えた提言も含まれている。</p> <p>総じて、本研究は確固とした問題意識にもとづき、十分に問題の背景を調査し、定量的な分析手法を用いた熟度の高い論文であり、博士（学術）の学位論文の水準にあるものと結論付けることができる。</p> <p>平成20年8月29日に、北九州市立大学北方キャンパス都市政策研究所会議室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施し、吉村英俊氏が優れた研究業績を既に有し早期修了の要件を満たしていることを確認し、論文内容の説明を受け、質疑応答の後に、全員一致で当該論文が博士（学術）として十分な内容であると判定した。</p>

平成 20 年度学位（博士）の授与に係る論文内容の要旨及び論文
審査結果の要旨 第 8 号 （平成 20 年 9 月授与分）

発行日 2008 年 10 月

編集・発行 北九州市立大学 教務課

〒802-8577

北九州市小倉南区北方四丁目 2 番 1 号

電話 093-964-4021